

頭髮の故事

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫

日曜日の朝、わたしは剥取曆はぎとりごよみのきのうの分を一枚あけて、新しい次の一枚の表面を見た。

「あ、十月十日——きようは双十節だったんだな。この曆には少しも書いてない」

わたしの先輩の先生Nは、折柄わたしの部屋に暇潰しに来ていたが、この話を聞くと非常に不機嫌になった。

「彼等はそれでいいんだ。彼等は覚えていないでも、君はどうしようもないじゃないか。君が覚えていてもそれがまた何になる」

このN先生というお方は本来少し変な癖があつて、ふだんちよつとしたことにも腹を立て、ちつとも世間に通ぜぬ話をする。そ

ういう時にはいつもわたしは彼一人に喋舌しゃべらせて一言も合槌を打たない。彼は一人で議論を始め、一人で議論を完結すればそれで納得するのだ。

彼は説く。

「わたしは北京ペキンの双十節の次第を最も感服するのである。朝、警官が門口に行つて『旗を出せ』と吩咐いいつける。彼等は『はい、旗を出します』と答える。どこの家でも大概は不承々々に一人の国民が出て来て、斑点だらけの一枚の金巾かなきんを掲げて、こうしてずっと夜まで押しとおし——旗を収めて門を閉めるのであるが、そのうち幾軒は偶然取忘れて次の日の午前まで掲げておく。

彼等は記念日を忘れ、記念日もまた彼等を忘れる。

わたしもこの記念日を忘れる者の一人だが、もし思い出すとすれば、あの第一双十節前後のことで、それが一時に胸に迫つて来て、いろいろの故人の顔が皆眼の前に浮び出し、居ても立つてもいられなくなる。幾人の青年は、十年の苦心空しく、暗夜に一つの弾丸を受けて彼の命を奪とられたことや、幾人の青年は暗殺に失敗して監獄に入れられ、月余の苦刑を受けたことや、幾人の青年は遠大の志を抱きながら、たちまち行方不明になって首も身体からだもどこへ行つたかしらん——

彼等は社会の冷笑、悪罵、迫害、陥穽の中に一生を過し、現在彼等の墓場は早くも忘却され、次第々々に地ならしされてゆく。わたしはこれらの事を記念するに堪えない。それよりもわたしは

今だに覚えている小気味のいい話をして聞かせよう」

Nはたちまち笑顔になり、手を伸ばして自分の頭を撫でまわしながら、声高に語った。

「わたしの最も得意としたのは、最初の双十節以後のことで、その時はもうわたしが道を歩いてても人から笑われることがない。

老兄、君は知っているだろうが、髪ねうちの毛はわれわれ中国人の宝であり、かつ敵である。昔から今までどれほど多くの人が、この頂ねうちきのために何の直打ねうちもない苦しみを受けつつあったか？

ずっと昔のわれわれの古人について見ると、髪ねうちの毛は極めて軽く見られていたらしい。刑法に拠れば人の最も大切なものは頭脳だ。それゆえに大辟しけいは上刑である。次に必要なものは生殖器であ

る。それゆえに宮刑さいおきりと幽閉へいもんは、これもまた人を十分威嚇するに足る罰である。かみきりに至つては微罪中の微罪だが、かつてどれほど多くの人が、くりくり坊主にされたため、彼の社会から彼の大事な一生を蹂躪されたかしれん。

われわれは革命の講義をする時、楊州十日ようしゅうとおか（清初更俗しんしよこうぞくき強制ようせいの殺戮）とか、嘉定屠城かていとじょうとか大口開いて言つたものだが、実は一種の手段に過ぎない。ひらたくいうと、あの時の中国人の反抗は亡国などのためではない、ただ辮子べんつを強いられたために依るのだ。

頑民がんみんは殺し尽すべし、遺老は寿命が来れば死ぬ。辮子べんつはもはやとどめ得た。洪、揚こうよう（長髮賊の領袖りょうしゆう）がまたもや騒ぎ出し

た。わたしの祖母がかつて語った。その時の人民ほど艱つらいものはない。髪を蓄えておけば官兵に殺される、辮子を付けておけば長髪賊に殺される。

どれほど多くの中国人がこの痛くも痒くもない髪のために苦しみを受け、災難を蒙り、滅亡したかしれん」

Nは二つの眼を睜みはつて屋根裏の梁を眺め、しばらく思いめぐらしてなお説き続けた。

「まさか髪の毛の苦しみが、わたしの番に廻つて来ようとは思わなかった。

わたしは留学に出るとすぐに髪を切った。これは別に深い意味があつたわけではなく、ただこれがあると何かにつけて不便を感じず

るからだ。ところが、ここに意外にも何ほどかの同窓生——頭の
上にぐるぐると辮子を巻きつけた彼等がまずはなはだわたしを嫌
い出し、監督も大おおに怒おこつて、わたしの学費の支給を差留め、中国
に送り返すと言った。幾日も経たぬうちにこの監督さん自身も人
から辮子を剪きられて逃走した。剪り取る人達の中には革命軍の鄒す
容うようという人もいた。この人もそれがため二度と留学することが
出来ず、上シャンハイ海ハイに帰つて来て、後には租界監獄の中で死んだが、
君はもうとうに忘れてしまつたらうな。

四五年経つと家の都合がだいぶん以前とは違つて来て、何か些
細の仕事でもしなければ餓うえそうになるので是非なく中国に帰つ
て来た。わたしは上シャンハイ海ハイに著つくや否や、一本の仮つけまげ辮子を買取り

——その時二円の市価であつた——家へ帰るまで付けて歩いた。
母親は結局なんにも言わなかつたが、よその人は一目見るとまずその辮子について研究し始め、それが似非物であると知るや、すぐに冷笑を浴せかけ、わたしを断頭の罪名に当てた。本家にあたるある者はわたしをお上に訴える準備までしたが、後で革命党が謀叛を起してあるいは成功するかも知れないと思つてこれだけは止めた。考えてみると似非物は真物のザツクバランに優ることはない。そこでいつそのこと、辮子を廃し、洋服を著て、大手を振つて往来を歩いた。

街を通ると街中が笑い声になつた。中には後へ跟いて来て罵る者がある。

『唐変木』

チャーヤンタイ

『仮洋鬼』

そこでわたしは洋服を著ずに支那服に改めると、彼等の悪罵はいつそう激しくなった。

いよいよせつぱ詰った時、わたしは手に一本のステッキを持って出掛け、そういう奴等を片端から叩きのめした。で、彼等はようやく罵らなくなつたが、まだ打つたことのない新しい地方へ行くことやつぱり罵られた。わたしはこの事について非常に悲哀を感じ、今も時々思い出すのである。それはわたしの留学中に新聞に掲載された本田博士はくしの南洋及び中国視察談である。この博士は支那語も馬來語マレイもわからなかつた。ある人が『君は話が出来ないで

どうして旅行する』と聞くと、博士は持っていたステツキを示し、『これがすなわち彼等の言葉さ。これさえあれば皆解る』と答えた。わたしはこの記事を見た当座、腹が立って三日ばかり飯も食えなかった。ところがわたしは知らず知らず自分でそれをやっていたので。しかもそれが彼等に対して一番よくわかるのだ。

宣統^{せんとう}初年わたしは当地で某中学の校長を勤めていたが、同僚には嫌われ、官僚には警戒され、終日^{こおりぐら}氷倉の中に坐っているような、刑場の側^{そば}に立っているような憂鬱さを感じたが、実は何をしたわけでもない、ただ一本の辮子がなかつたからだ。

ある日のこと四五人の学生が突然わたしの部屋に入つて来た。『先生、わたし達は辮子を剪ろうと思ひますが』

『いけません』

『辯子がある方が好うございますか、無い方が好うございますか』

『無い方がいい』

『ではなぜいけないとおっしゃるのですか』

『する事が出来ないのです。お前達はまだ剪らない方がいい。待つていなさい』

彼等は何も言わず口を尖らせて出て行つた。そうして結局剪り取つてしまった。

おや、まずいまずい、人声がガヤガヤした。わたしはそれでも知らん振りして、彼等のイガ栗頭と辯子頭と一緒に交つて講堂に登るに任せた。

さはさりながらこの髪かみきりびよう斬病は伝染した。三日目には師範学
堂の学生がたちまち六本の辮子を剪り落した。晩になると六名の
学生は隔離された。この六名は学校に行くゆことも出来ず、家うちへ帰
ることも出来ず、ずっと第一双十節の後まで、一ヶ月余りも愚図
々々して、ようやく犯罪の烙印が消えた。

わたしはね、わたしもやはり同様だった。元年の冬、北京ペキンへ行
くと人から幾たびも罵られたが、後ではわたしを罵った人が警察
で辮子を剪られた。それから二度と人に罵られたことがない、し
かし田舎は知らない」

Nは非常に得意になったが、たちまち沈んだ色を現わした。
「現在君達一派の理想家がここにまた女子の断髪云々をやかまし

く説いているが、それは少しも得る処無くして、かえつていろいろの苦痛を造り出すのだ！

現在すでに髪を斬った女がそれに因つて学校へ入学が出来ず、あるいは学校から除名されつつあるではないか。

改革するにも、武器がない。苦学するにも働く工場がどこにある。

やはり元のように娘を人の家に嫁にやり、一切を忘れしむるのが、かえつて幸福だ。彼女をしてなまじい自由平等の話を覚えさせたなら、それこそ一生涯の苦痛だろう。わたしはアルチバセフの言葉を借りて君達に訊ねる。君達は黄金時代の出現をこれらの人達に予約した。しかしこれらの人達は一体何を与えられたか。

おお、造物の皮鞭が中国の脊髄の上に至らぬ時、中国はすなわちとこしえにこの一様の中国である。それ自身は決して一枝毫末の改変をも肯き入れない。

君達の口の中には毒牙のあり得るはずがない。しかし何故に『蝮蛇』の二大文字を額の上に貼りつけて、ひたすら乞食を引張り出して打殺そうとするのか」

Nの話はますます冴えて来たが、わたしの顔色が、あまり聞きたくないようであると見るや、たちまち口を噤んで立上り帽子を取った。

「帰るのか」

「ウン、雨が降りそうだからな」

わたしは黙々として彼を門口に送り出した。彼は帽子をかぶつて言った。

「いずれまた会おうよ。お邪魔して済まなかった。あすはいい挨拶に双十節でないから、我々は何もかも忘れていい」

(一九二〇年十月)

青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の書き換えをおこないました。

「或↓ある 或は↓あるいは 一層↓いつそう 被仰る↓おつし
やる 却って・反つて↓かえつて か知ら↓かしら 且つ↓かつ
曾て↓かつて 爰に↓ここに 御座います↓ございます 此・

此の↓この 此↓これ 併し↓しかし 而も↓しかも 即ち↓す

なわち 其↓その 大分↓たいぶん 只↓ただ 忽ち↓たちまち
 度↓たび 為め・為↓ため 一寸↓ちよつと 就いて↓ついて
 (て)置く↓(て)おく (て)仕舞う↓(て)しまう 何処
 ↓どこ 尚お↓なお ※「#」(來+文)／心」、第4水準2-12-
 72] い↓なまじい 筈↓はず 甚だ↓はなはだ 程↓ほど 先ず
 ↓まず 益々↓ますます 又・亦↓また 未だ↓まだ ※「#
 「にんべん+湊のつくり」、第3水準1-14-30] し↓もし 八釜し
 く↓やかましく 矢張り↓やはり」

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」(区点番号5-86)を、大振りにつくっています。

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（荒木恵一）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2008年5月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.w.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

頭髪の記事

魯迅

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 井上紅梅訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>